

厚木市史たより 第12号

平成27年3月1日

題字は渡辺華山筆「游相日記」から文字を抽出して作成したため、清音の「たより」としました。

厚木市内出土の瓦について

公益財団法人かながわ考古学財団 高橋 香

1 はじめに

「瓦」という文字を聞いて、どのようなイメージが頭に浮かぶでしょうか。瓦が頭につく文字を調べると「瓦礫」とか「瓦解」といった、なんだかあまりよいイメージのない二字熟語がでてくるかと思いますが、この瓦、一つ一つに色々な情報を私たちに教えてくれる宝物でもあるのです。そんな宝物の部分を、ちよつと紹介していきたいと思えます。

奈良に都があった時代、大山を背に自然の恵みをうけながら、相模川を挟んだ川向かいには相模国分僧寺（海老名市）がそびえたつ、そんな光景を前にしながら、相模川西岸にはたくさ

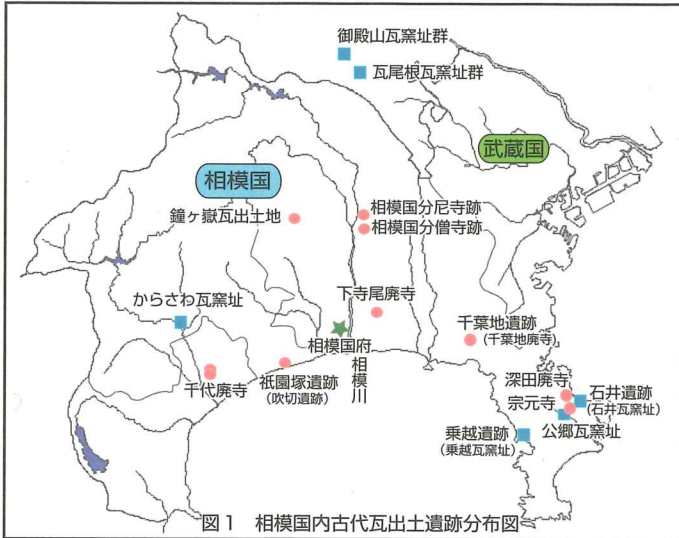


図1 相模国内古代瓦出土遺跡分布図

んの集落が展開してきて、相模の国を支えていたのでしょうか（図1）。

厚木市域は古代の行政区画でいうと大部分が愛甲郡に含まれます。瓦は、屋根をもつ建物があるところ、つまり、お寺や国府・郡衙といった役所跡から確認されることが多いのですが、この愛甲郡では「初期寺院」を含め古代寺院がまだ見付かっていないため、古代寺院の存在の有無は分かりません。ですが、古代集落跡等の遺跡の発掘調査や採集によって瓦を見ることができず（図3）。

厚木市内で古代の瓦が確認された遺跡は、

- 上依知上谷戸遺跡（上依知）
- 峯ヶ谷戸遺跡（上依知）
- 瓦尾遺跡（瓦尾）
- 山王下遺跡（中荻野）
- 恩名片岸遺跡（恩名）
- 恩名沖原遺跡（恩名）
- 小野若宮遺跡（森の里）
- 温水中原遺跡（第2地点）（温水）
- 鐘ヶ嶽（七沢）
- 弘徳寺（飯山）

等があげられます。確認されている遺跡の中には、古代寺院の可能性が高い遺跡もありますが、確実に「古代寺院」です、という遺跡からの出土ではなく、ほとんどが集落遺跡からです。瓦は屋根に葺かれなくなった時点で不要なものになりますから、色々な再利用をされていることが発掘調査で明らかにされています。例えば、当時の人々が暮らしていた竪穴住居跡のカマドの袖の芯材として使用している事例があげられます。その好例としてあげられるのが、平塚市の相模国府域である大会原遺跡から確認された軒丸瓦で、屋根に葺かなくなった瓦なのでしょ



図2 平塚市大会原遺跡 8区 NH70号住居カマド 遺物出土状況
かながわ考古学財団 2009「湘南新道関連遺跡Ⅱ」神奈川県教育委員会所蔵

材として利用されるのです。大会原遺跡の事例の他、茅ヶ崎市の下寺尾廃寺に隣接する集落から、同じように丸瓦や平瓦をカマドの芯材として使用していることが分かっています。カマドの袖を構築する部材の事例としては、土師器の甕や石などがあげられますが、古代寺院等、瓦を使用する建物がある周辺の遺跡などからは、瓦も袖の芯材として使用しているようです。瓦そのものが厚いので、袖の補強材としては優秀だったのかもしれませんが。

しかし、厚木市内で瓦が確認された遺跡は、古代寺院等瓦を多く使用した場所の近くというわけではありません。なぜ見付かったのでしょうか。これから、厚木市内で確認された瓦の様相について、少し見ていくことにしましょう。

2 恩名片岸遺跡出土の瓦について

まず、恩名片岸遺跡から出土している軒丸瓦

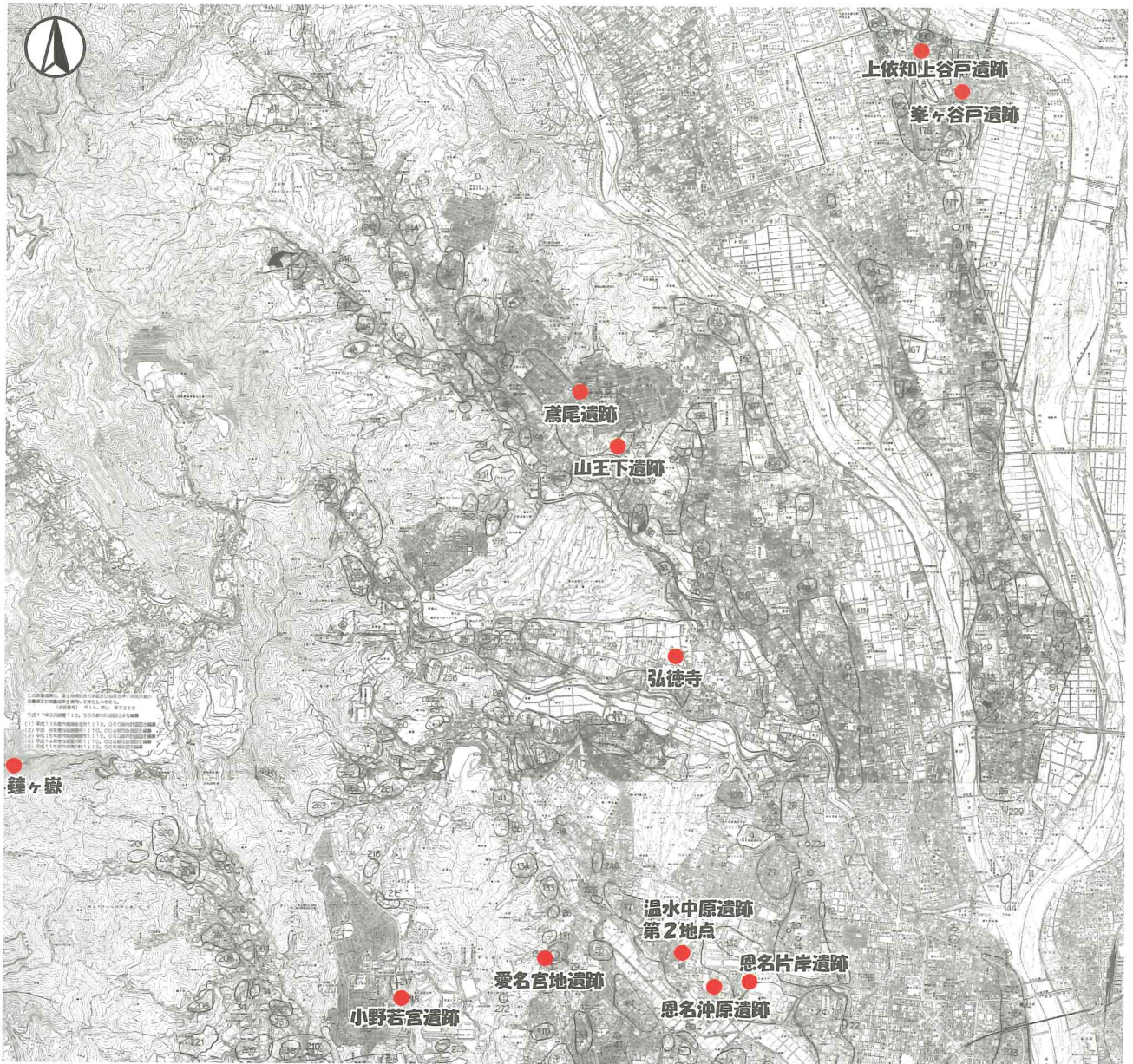


図3 厚木市内瓦等出土遺跡位置図

がちよつと変わった形をしているので、これからお話をしているかと思えます(図4)。まるで、レンコンを半分に切ったような形をしています。これは蓮の花、つまり蓮華文を幾何学紋化したものと考えられます。「蓮の花」はお釈迦様を象徴するお花であることは有名ですが、軒瓦の文様や仏像の台座・光背などのモチーフとして多く使用される文様意匠です。

この幾何学紋的な意匠は、横須賀市にある古代寺院・宗元寺の平瓦に見られるスタンブ文や、奈良県・法隆寺の蓮華文鬼板、京都市・櫻原廃寺の蓮華文鬼板に見ることが出来ます。よくよく観察してみると中央の中房は凸型中房で、わずかに蓮子を確認することが出来ます。瓦の裏面は指でナデるといふ調整をしていますが、けっこう粗雑な印象を受けます。瓦の作り方は知っていても、急いで作られた結果なのではないでしょうか。この文様と全く同じ文様の瓦は今のところ県内では見ることができません。

他には、凹面側(平瓦の布目が残る方が凹面、縄叩きで叩かれている方を凸面といいます)に「山万」と書かれた盛りあがった文字がある平瓦が見られます。これは「模骨文字瓦」というもので模骨文字の瓦は、八王子市に所在する御殿山瓦窯址群等で作られている瓦です。瓦を作る成形台に予め陰刻されており、それが転写されて文字として移っていると考えられています。御殿山瓦窯では、いくつが生産されているもので「山万」の他に逆「生」・「土」・逆「上」・「正」・「上」・「大」・「十」・「h」・「工」等があります。模骨文字の瓦は厚木市内の遺跡でも確認されていて、後でお話する鐘ヶ嶽でも見ることが出来ます。模骨文字の他に、凹面側を指で文字ないしは記号を描く「指ナデ文字」と呼ばれる瓦も確認されています。この指ナデ文字瓦は、町田市に所在する瓦尾根瓦窯で生産されていることが明らかにされています。相模国分尼寺(海老名市)へ瓦を供給していたことが分かっています。瓦尾根瓦窯では指で「十」や「大」などの文字を焼成前に描いている瓦が見られ、これと同じものが相模国分尼寺からも出土しています。



図4 恩名片岸遺跡出土瓦
(右上)軒丸瓦(表)、(右下)同(裏)、(左)模骨文字瓦「山万」
筆者加筆

恩名片岸遺跡では、「一」など数点の指ナデ文字瓦を確認することができません。軒瓦の瓦当(あき)面は剥離して詳細は不明ですが、「はめこみ技法」と呼ばれる技法の痕跡が残る丸瓦が確認されています。瓦の表の部分を瓦当といい、ここの部分を瓦当面といいますが、この技法は、丸瓦の広端面を外縁に見立てて瓦当面を後から作り、丸瓦との補充粘土は少量ですませる、というもので、瓦を作るスピードは速くなったかもしれませんが、補強面が弱く、瓦当面と丸瓦が剥離しやすい、という難点があります。この技法を用いた軒丸瓦が、御殿山瓦窯で製作された瓦の中であり、下寺尾廃寺でも同様な技法を用いた瓦を確認することができます。このことから、瓦当面は見付かつてはいませんが、軒丸瓦があつたことの証明になるのです。

ることや、瓦が確認されていることを踏まえると、古代寺院が想定されるかもしれません。

3 鐘ヶ嶽の瓦について

次に、鐘ヶ嶽から確認されている瓦についてふれていこうと思います。鐘ヶ嶽は、山間にある「山林寺院」に想定されているところです。今でも修験道で修行の場として使用しているところだそうで、修行の場としては最適な場所かもしれません。

「山林寺院」とは、「山の中にあるお寺」という意味で、仏堂の他様々な施設が山内に立地している寺院のことをいいます。鐘ヶ嶽は、本格的な発掘調査はまだ行われていませんが、瓦が採集されています。ここから採集された瓦は、軒丸瓦が2種類、平瓦・丸瓦が見られますが、うち軒丸瓦は小田原市にある古代寺院・千代廃寺(ちよだへいじ)と同範(型)の瓦であることが分かっています(図5)。「同範」とは、同じ範で作られた瓦のことを指し

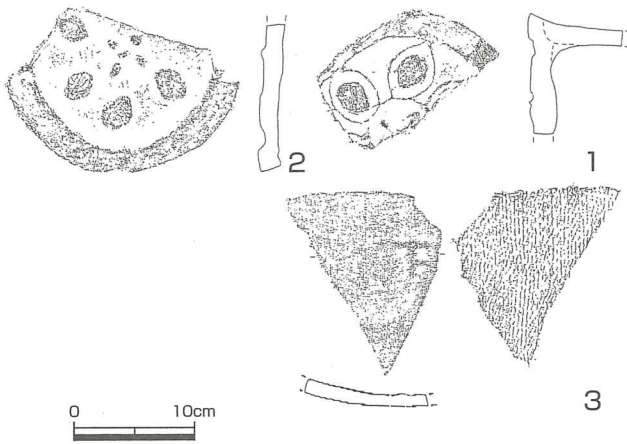


図5 七沢鐘ヶ嶽で採集された軒丸瓦(1・2)と平瓦(3)

ますが、同範である事を確定するには、範傷と呼ばれる細かな傷をみて、その傷が同じ位置にあるのかを確認する作業から始まります。瓦当範は、一部陶製の瓦当範もありますが、木範で作られることがほとんどです。基本的に瓦当範は、一つの文様につき一つであることが多く、何度も使用することで割れ目が生じてくるようになります。この割れ目が転写されて瓦当面に付くのが「範傷」と呼ばれる傷で、この傷の多さによって瓦の作られた順番が分かるのです。鐘ヶ嶽で採集された軒丸瓦は、3弁が残存している蓮華文で、蓮弁を線で区画している単弁の瓦です(図5の1)。中房部分は圏線で区画したもので、中に蓮子2つが配置されています。残存している蓮弁の配置が均一ではないことが特徴的であり、この文様意匠とまったく同じものが小田原の千代廃寺や御殿山瓦窯から見付かっています。

千代廃寺のものは、やはり完全な形ではないので全貌は不明ですが、御殿山瓦窯から確認されている瓦を見ると、単弁六弁の蓮華文で、圏線で区画された中房の中に1+4の蓮子が配置されていることが分かります。そして、この3か所から確認されている軒丸瓦の蓮弁の部分には多くの範傷を見ることができ、この傷の位置が千代廃寺から確認されているものと同じ位置にあることから、同範の瓦であることが分かります。

また、御殿山瓦窯で確認された瓦はとも範傷が多く、何度も大切に使用していたことを物語っています。もう一つの瓦は、4弁が残存している蓮華文軒丸瓦で、中房部分は圏線で区画せず蓮子が1+4で構成されています(図5の2)。この軒丸瓦にとっても似ている瓦が、武蔵国分僧寺(東京都国分寺市)や武蔵国府関連遺跡(同府中市)から見付かっていますが、これらの瓦は中房を区画する圏線があるので、少し様相が異なります。ただ、蓮弁と蓮子が一直線に並ぶ様子など、とてもよく似ているので、圏線を削るなどの改刻をしたのかもしれない。それほどよく似ている瓦ですが、全く同じかどうかまでは判断が難しいところです。中房の蓮子と蓮子の間に範傷があることから、ここを目安に同

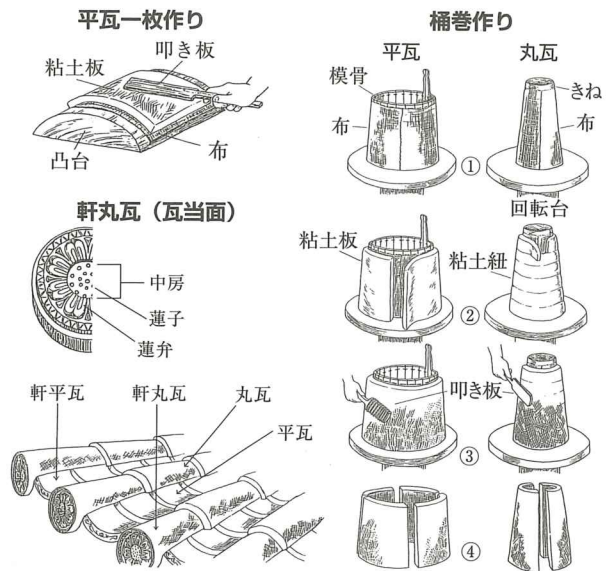


図6 瓦の製作工程と各部名称 (『図解 技術の考古学』より作成)

平瓦が分かるかもしれませんが。ただ、文様構成はもちろんです。作り方をみてもよく似ているので、武蔵国分僧寺等から出土している瓦をモデルにしたことは、ほぼ間違いないかもしれません。胎土の様相をみても、御殿山瓦窯産の瓦と、とても関係の深い瓦として考えることができます。

軒丸瓦の他に特徴のある瓦としてあげられるのが、先程も述べている模骨文字と呼ばれる平瓦があります。鐘ヶ嶽で確認されているのは逆「上」というもので、このタイプのものが数点確認されています(図5の3)。

4 平瓦の作り方について ―桶巻作りと一枚作り―

さて、この平瓦、作り方は大きく二種類あります(図6)。まず、「桶巻作り」という作り方から始めますが、これは大陸から伝わった製作技法です。桶状の枠に粘土を巻き付けて、それを四分割ないしは三分割にして作ります。しかし、この作り方だと、技術的に誰もが出来る作り方ではなかったでしょう、その後、

たくさん瓦が必要になったことから編み出されたのが「一枚作り」という製作技法です。一枚作りの瓦は、「タタラ」という長方形に成形した粘土の塊から糸切りで切り取った粘土板を、一枚作りの成形台に当てて作ります。粘土板で作る以外に、粘土紐状にしたものを一枚作りの成形台に上から順番に伸ばして作る「粘土紐一枚作り」という瓦があります。これらは、接合痕跡が明瞭に分かる特徴があり、このつくり方は先程からお話している御殿山瓦窯産の瓦に見ることが出来る技法で、模骨文字の平瓦には見られません。

模骨文字瓦は、神奈川県内でも確認する事ができます。例えば、厚木市内だと上依知上谷戸遺跡、鐘ヶ嶽、恩名片岸遺跡があげられますし、茅ヶ崎市の下寺尾廃寺、相模原市橋本遺跡、鎌倉市山崎所在の天神山城遺跡、そして相模国分僧寺周辺で採集された瓦として『海老名市史』で紹介されています。御殿山瓦窯址群の瓦生産のピークが10世紀代で、この時期に瓦を生産していた瓦窯が御殿山瓦窯しかなかったため、一極集中で武蔵国・相模国の瓦生産を担っていた結果なのでしょう。もちろん御殿山瓦窯産とは考え難い瓦も少し見られますので、全てをカバーしていたとは考えにくいと思われる。

5 たまご瓦

厚木市内で確認されている瓦を見ると、大体9世紀後半〜10世紀代の瓦が多く見られることに気がつきます。国分寺建立以前のお寺に使用されていた桶巻作りの平瓦等が出土する遺跡を見ることができないのです。同じ相模国の中で、他の郡内では古手の瓦、つまり国分寺創建以前の瓦が確認されているのに対して、愛甲郡内では古手の瓦が見られないのも不思議な感じがします。一部、山王下遺跡から確認されている丸瓦が、若干古手の部類に入るかもしれません。鳶尾遺跡の南側に位置する集落遺跡ですが、この遺跡から出土した丸瓦を見ると、凸面の調整方法や作り方が、今ま

で見てきた瓦よりは若干古手の様相が見られるのです。千代廃寺や下寺尾廃寺のようないわゆる「平地寺院」は見られませんが、「山林寺院」とよばれる寺院が厚木市内にいくつも見られることに注目することが出来ます。厚木市内に山林寺院が見られるのは、背後にそびえる大山が大きく関係しているのだと思われれます。例えば、愛名宮地遺跡は、現段階では御堂と想定されている掘立柱建物跡が一軒しか確認されていませんが、布掘建物から礎石建物へと変化するなど一定期間継続していたことが明らかにされています。愛名宮地遺跡からは、瓦は一点も出土していませんが、「瓦塔」とよばれる陶質の焼き物の塔が出土しています。瓦塔は、比較的県内でも見つかってはいますが、ポピュラーな遺物ではなく、やはり特殊なところから発見される遺物です。山林寺院でも、瓦が出土する遺跡はありますが、立地的な問題もあるのでしょうか、比較的瓦を用いない事例が多い傾向にあります。その中で、鐘ヶ嶽の立地を踏まえると「山林寺院」でありながら、こうした平地寺院と同じ瓦をもつ古代寺院が想定されることから、その背景に何があったのかを考えていく必要があります。本格的な発掘調査が行われていませんので、正確なことはいえませんが、採集された資料をみる限り、少し特別なお寺だったのかもしれない。その背景に何かあるのか、この答えはもうちょっと突き詰めて考えていきたいと思います。

厚木市史たより 第12号

平成27年3月1日発行

編集 厚木市教育委員会文化財保護課

発行 厚木市

住所 神奈川県厚木市中町三-17-17

電話 〇四六-二二五-二〇六〇

FAX 〇四六-二三三-〇〇八六

「厚木市史たより」は厚木市ホームページにも掲載しています。